再臨のキリストによる
第４福音書

太陽を着た女
—公人生の記録—

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING

No. 4

WOMAN IN THE SUN II

SEIDOU
正道

目次

第 2 部　太陽を着た女
第４福音書 3
全体の目次 4

第 1 章　真昼の白日
（1）推敲に徹した時期 7
（2）流行の先端を見る 10

第 2 章　夕暮れの熱情
（1）陽子との出会いと恋 15
（2）信仰対象破壊の危機 18
（3）残酷な聖職者 22

第 3 章　暁闇の淵
（1）最も暗い夜 29
（2）悲しみの底 33
（3）詩が生まれるとき 37

第 4 章　曙光差す（ルベドの悟り）
（1）重なり合う二つの手紙 43
（2）ルベドの悟り 46
（3）光と闇の結婚 48

第５章　曇れる日
（1）自分の心を知る 55
（2）陽子との別れ 57

第 2 部　太陽を着た女

第４福音書

再臨のキリストによる
第四福音書

太陽を着た女
——公人生の記録

第二部　太陽を着た女

一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。

全体の目次

第１部 月に待つ女

第１章　喜びが苦しみであること
第２章　女性恐怖、女性蔑視
第３章　行き止まりからの始まり
第４章　妊婦とともに
第５章　ウル・アトラスの執筆
第６章　アルベドの悟り
第７章　さすらいと火の柱

第２部 太陽を着た女

第１章　真昼の白日
第２章　夕暮れの熱情
第３章　暁闇の淵
第４章　曙光射す（ルベドの悟り）
第５章　曇れる日

第３部 地に憩う女

第１章　創作の軌跡
第２章　夫として、父として
第３章　召命のとき

第１章　真昼の白日

（１）推敲に徹した時期

濃密な一年

二二歳から二三歳にかけては、私の悟りにとって、もっとも重要な契機が与えられた時期だった。この短い期間に、あまりにも立て続けに、不思議なことが起こったのである。

神的ドラマとしての密度で言えば、「月に待つ女」の八年分を合わせたものよりも、この「太陽を着た女」の約一年分のほうが、よほど濃密なのではないだろうか。

ところで、先に読んでいただいた「さすらいと火の柱（第一部第７章）」の対象時期は、二一歳の中盤から、二二歳の中盤あたりである。

その後の私が何をやっていたかというと、夕方から深夜にかけてはアルバイト。昼間は『アトラス』の推敲を続けていた。

正直なところ、この推敲には、まったく終わりが見えなかった。

しかし、天から授けられた作品を、自分の文章力の未熟さのために、不完全な状態のままにしておく訳にはいかない。できる限り『アトラス』を、完全な状態に高めなければならない。そうした使命感が、無能力な私を突き動かしていた。

しかも他面においては、『アトラス』を推敲する度に「登場人物の言動の背後にある心理状態」や「その場面場面の象徴的意味」が、私の中で、やたら気にかかってくるようになった。

そして、よせばいいのに私は、その意味を深々と考え、その思索を「あらずもがなの緻密なト書きとして」小説内に書きつけていった。そのようなことをすれば、作品の、文学作品としての冗長化は、絶対に避けられないのに。

当然の結果として、私の『アトラス』は、しだいに巨大化していき、かつ、どんどん理屈臭いものになっていった。

理論家の胎動

『テロス第一』や『ヘルメスの杖、上下』を読了している人にとっては、私はおそらく「理論的な人間」であるはずだ。

よってカテゴリー的には、哲学者、神学者の類に位置づけられる人間であることだろう。

それは当然の印象であろうし、事実に反しているという訳でもない。しかしながら、私という人間が、もとからそうであった訳では、全然ないのだ。

はじめにあったのは十代の「漫画を描いている人間」だった。

それが二十歳頃に「絵を描く人間」と「文章を書く人間」に分裂する。漫画は明らかに「絵と文章」の混在で構成されているが、この二つの構成要素が、各々に分離したのである。

そしてさらに、その「文章」が、二五、六歳ぐらいのときに「文学的作品」と「理論的作品」に分離する。

私の場合、文学的作品とは「小説、戯曲、詩」であり、理論的作品とは「哲学書、神学書」あたりのことを指す。

したがって、二二歳当時は、私の「まだ胚芽状態だった」理論家の部分が、小説家正道のなかで、ゆっくりと胎動し始めた時期だったのである。

そして、その「理論家という胎児」の成長のフィールドとして、上述の「『アトラス』の推敲」という状況が利用された。

つまり『アトラス』が、小説なのにやたら理屈臭くなったのは、それが「理論家という胎児を孕んだ母体的文学作品」だったからなのである。

だがそうなるのも無理はない。なにしろ私には『アトラス』以外の文章作品は、何一つ与えられていなかったのだから。

理屈くさい文学作品

とはいえ、読み手にとっては「理屈くさい文学作品」ほど、うっとおしいものはない。

私もユゴーの『レ・ミゼラブル』を読んでいるときに、それを強く感じた。

本筋は面白いのに、それをブチブチと断ち切られては、理屈くさい脱線を聞かされる不愉快さ。その際の苛立ちは、まさに言語に絶する。あれは本当に、たまったものではなかった。

それなのにである。それを知っている私が書いているのにである。明らかに『アトラス』は、『レ・ミゼラブル』と同じように、理屈くさい脱線を繰り返していた。

なにしろ、キャラクターが少し活動する度に、そこに「その活動についての、詳細な説明」がつくのである。きわめて丁寧に、まことにしんねりむっつりと。

その意味で、この時期の『アトラス』は、思想的な完成度は増していったが、それと同時に、文学作品としては迷走していったと言える。

しかも、この迷走は、二七歳のときに、私が哲学書である『アルベド』を書くまで続くのだ。

そうやって一つの哲学書を完成させた時点で、私はようやく「純粋な理論家」として「理屈くさい文学者」から独立できたのである。

そのとき初めて「真に自分が、理論家として活動できる場所」を見い出したからだ。

そして、そのように理論家の自分と、文学者の自分を分離できたときに、はじめて『アトラス』のほうも、自身の「文学作品としての純粋性」を取り戻す機会を得た。

こうして生まれるのが『アトラス、最終稿』である。

その完成は、私が三〇歳の頃のことだった。

よって、初稿である『ウル・アトラス』の執筆から『アトラス、最終稿』の上梓まで、ちょうど十年の歳月が流れたことになる。どうやら私の成長は、遅々としてしか進まないらしい。

しかし『アトラス、最終稿』では、たしかにストーリーの滞りが無くなった。そこに「不要な理屈」が持ち込まれなくなったからだ。

そして、それは間違いなく『アトラス』の「作品の文学的価値が高まったこと」を意味しているのである。

（2）流行の先端を見る

アルバイト先の様子

話を二二歳の後半に戻そう。私のアルバイト先は、レンタル・ビデオ店だった。

現代は、ブルーレイやDVDが、ビデオ・レンタルの主流だが、当時はVHSを貸し出していた。いわゆる「ビデオテープ」である。

まことに懐古的だが、それでも当時としては、そこは流行の最先端が垣間見られる場所だった。CDの販売なども行っていたので、最新のJポップなどが、ずっと店内に流れていた。

音楽で言えば、小室哲哉氏の全盛期である。とりわけ、安室奈美恵やgloberのCDが、ものすごい勢いで、店の平棚から消えていったことを覚えている。

では、そういう流行の最先端に、私が関心を持っていたかといえば、それはほとんど無かったというのが真相だった。このレンタル・ビデオ店をアルバイト先に選んだのも、単に、家から近かったからに過ぎないのだ。

しかし、そんな野暮な手合いは私ぐらいのもので、他のアルバイト生は、やはり流行に敏感だった。だから、きっとファッションの意味合いで、その店をアルバイト先に選んでいたのだと思う。

それだけにアルバイト生は、若い子たちばかりだった。とくに十代後半から二〇代前半にかけての女の子が多かった。

自足終息している性

そういった訳で、私の周りには、やたらと若い女の子がいた。しかし、そのせっかくの女の子たちに対して、私が特別な関心を持つことは、ほとんど無かった。

というのも、私は「自分が女の子を好きになる」ということを、完全にあきらめてしまっていたからである。

読者にあっては、奇妙に思われるに違いない。しかし私は、あのアルベドの体験によって、精神的にヘルマプロディトス（両性具有）になっていたのである。

くわしく説明しよう。そもそもアルベドは、霊的な意味で「妊婦」の状態を現出させる。

そして、お腹のなかの胎児が男の子である場合、妊婦は、ひとつの体のなかに、男女の両性を宿している存在となる。

つまり極めて簡明に表せば「母親が女、子供が男。それらが一つになっている」わけだ。そうであるならば、これを両性具有と呼べないことはないだろう。

そのように両性具有ということは、性的に自足しているということでもある。要するに自分のなかに「性の十全性」がある訳だ。

だから結果的に、心の中に「自分に欠けている部分、自分の不足分を補いたい」という欲求が生じない、ということになる。

そして「霊的な妊婦状態‐アルベド」を体験した私の心は、まさにそういう状態にあった。

そのため、身近に女の子を見ても、私には「たぶん、それが無くとも自分が困らない存在」という感じしか、しなかったのである。

こと恋愛に関しては、私は「不能になった老人」のようですらあった。何としても、そこに関心が湧かないのである。完全に恋愛を諦めてしまっていたと言ってもいい。

私にとって女性は、どちらかというと崇敬の対象だった。いや、信仰の対象であった。私は、神秘体験（アルベド）の絶対性と同じぐらい、女性たちを「絶対的な信仰」をもって眺めていたのである。

第 2 章　夕暮れの熱情

（1）陽子との出会いと恋

唐突に訪れた恋

女性に関わりさえしなければ、男の生活と感情は、大概において平穏を保つことができる。とりわけ宗教的な人格にとってはそうだろう。

だから当時の私の心は、まるで春の日の午後のように、澄んで穏やかだった。

ところが、その平穏を、劇的に打ち破る出来事が起こった。他でもない「彼女」が、私の前に現れたのである。

シーナのときとは異なり、こちらは完全なる仮名にする必要があるだろう。今後の話の展開に思いを馳せればである。

じつは彼女こそが、本書のタイトルでもある「太陽を着た女」なので、その仮名を「陽子」とでもしておこうか。

この陽子は、新しいアルバイト生で、年齢は十九歳だった。大学に通いながら、アルバイトに来ていた形だ。彼女はとても陽気なタイプで、人を笑わせるのが好きだった。

多少失礼にあたるが、陽子には、色香のようなものは、ほとんどなかった。むしろショートカットの髪が、快活でボーイッシュな雰囲気を醸し出していたと言えよう。

ということは、他のアルバイト生と比べても、陽子は「女性」を感じさせる要因が、むしろずっと少なかったのだ。それにも関わらず私は、この陽子を、どうしようもないほど好きになってしまった。

好きになった理由など、今では全く思い出せない。それは不自然なぐらい唐突で、馬鹿みたいに真剣な気持ちだった。

ただし、私の霊的な嗅覚は、そこに「運命の匂い」を嗅ぎ取っていた。自分と彼女との間に、何か霊的に重大なことが、起こりそうな予感があったのである。

私の「新生」

ところで私は『アトラス』を推敲している最中に、詩を書くことに目覚めていた。そのため陽子への想いが、当時創作した詩群のなかに、色濃く残っている。

当時の心情を再現しようとしている今、これを使わないのは絶対に勿体ないだろう。よって、それらの詩を適宜挟み込みながら、これ以降の叙述を展開していきたいと思う。

そういえば、ダンテの作品に『新生』というタイトルの佳作がある。
これは、ダンテの若い頃の恋愛詩と、後年における彼自身の「往時の解説」とを、サンドイッチ状に挟み込んだ作品である。
つまりそれは、これから私が採ろうと思っている文章形式と、まったくの同一なわけだ。よって、ここからは私なりの『新生』が始まると言えるかもしれない。
ただし、この時期につくった詩は、一つの文脈の息が長く、スマートフォン等の画面では、本来的な詩形を示すのが困難である。
そこで本書では、私はいっそのこと、詩を散文の形式に落とし込んでしまおうと思っている。
そのほうが、まだしも詩情を逃さずに済みそうだし、また視覚的な不快感も回避できそうな気がするのだ。
なお、言わずもがなの話ではあるが、凡例として一応読者に断っておこう。以下《》に挟まれた題字に続くのが「散文形式に落とし込んだ詩文」に当たっている。
そういった事情を踏まえて、ではまず最初に次の詩を読んで頂こう。

《疑問》

過去よ、そこに生きていた私よ、お前は、どうしてそんなにも冷静でいられたのだ。どうして、遠い彼女の息吹を感じて、胸を焦がすことをしなかった。どうして、会ったことがない彼女を、夢想して苦しむことをしなかった。
お前が苦しまなかったために、私は、自分を不実だと思わずにはいられない。
どうして、私の生の全ては、彼女へ捧げられなかったのだ。
その理由が分らない。どうしても、今の私には。こんなにも彼女に焦がれている、今の私には。

この時点でも、すでに充分なくらいに熱情的であろう。しかし、次の詩などは、それを軽々と超えてしまっている。

《泥の情炎》

もはや情熱を超えて豪熱が巡る。今では、落ち着いた理性など厭わしいばかりだ。
ただ君を讃えていたい。僕が、それだけの存在になれたら、人間とは、どんなに偉大なものと誉むべきか。

僕は愛する。いや、君を自由になどするものか。僕は、君を我がものにしようとする。なんと醜きことか。けれど、その狭窄的な愚かしさに、僕はこの心をくれてやりたい。

　涙が溢れる。だが何の涙なのか知ることも厭わしい。知ろうとすることは、冷静さの範疇に入ることだからだ。

　僕は澄んだ情熱さえいらない。泥の情炎で身を滅ぼすことをこそ望む。そして、その死によって、君を永遠に想い続けるものへと変わりたい。
　君を僕のものにして、僕の魂は、君の中に融けいる。そして、新たな魂となって生まれよう。二度と苦しまぬために。

（２）信仰対象破壊の危機

告白と失恋

　これほどの想いを抱えながら、それを黙ってなどいられるだろうか。私はフラれても構わないから、直接この気持ちを、陽子に伝えようと思った。
　すると、ちょうどいいタイミングで、同じ時間帯に仕事をする日があった。それで、その日の帰り際に、思いを伝えようとしたのだった。
　この時、私は陽子に向かって歩いていき、にわかに口を開こうとした。
　ところが、先に言葉を放ったのは、意外にも陽子のほうだった。
　しかも、その言葉の内容が、意外の上にも意外なものだったのだ。彼女は唐突に、こう言ってきたのだった。
「あたし妊娠してるんですよ」
（……は？）
　私は、自分が何を耳にしたのか、ほとんど理解することが出来なかった。
「ニンシンシテル？」
「ええ、妊娠二か月の終わり頃らしいですよ」
　つまり妊娠しているらしい。私は、奇妙な非現実感のなかで言葉を探した。
「妊娠していて……子供を生むんだ」
「アハハ！　　やだ、生まないですよ。もちろん堕ろすしかないんです」
（？？？）
　私は混乱の極みに立たされた。もちろん、出来るだけ事態を整理しようとはする。
　自分には、どうしようもないほど好きな相手がいる。その人が、誰かの子供を妊娠している。
　それを、よりにもよって、これから彼女に告白しようとした矢先に知らされたのだ。これでは、どれほど混乱しても致し方なかろう。
　でも、ここまでならば、まだいい。まだ分かる。そういう事もあるだろうと思える。
　しかし陽子は、妊娠した子供を中絶しようとしている。あたかも、それが当然のことであるかのように。
　これは何なのか。あまりにも分からない。分からなすぎる！

他の誰が知らなくとも

私は結局、告白できずじまいの状態だった。

私の恋情は、炎のように燃えていた。だが陽子は、それを上回る大爆発でもって、私の炎を、一気に吹き飛ばしてしまったのだ。私の告白の言葉など、そこでは影も形もなくなってしまった。

おかげで陽子は、私の気持ちを知らないままだった。だから私は、このとき、あたかも何事もなかったかのように、陽子との関りを閉じることも出来た。

しかし私は「それ」を知っていた。

全人類が知らないとしても、自分の「陽子のことが好きだ」という気持ちを、私自身は、疑いようもなく知っていた。

しかも、女性の「妊娠と出産」は、私にとって、ほとんど信仰の対象だった。アルベディアンである私は、誰よりも、女性の「妊娠と出産」の価値とその大切さを知っていた。

私の信仰対象

肉体的な妊娠や出産は、いわば「地上に投影された、アルベドの影」である。光（アルベド）と、影（肉身の妊娠、出産）は、協働して一つの立体をつくる。

そして、この立体という概念の中では、光と影とは、決して、二つに切り離すことが出来ない。したがって、アルベドの「聖母」を信仰する私には、それと同様に、肉身の妊娠、出産をも、信仰する義務があるのだ。

だとしたら、中絶によって、自分の妊娠状態を自傷的にリセットしようとしている陽子は、イコール、私の信仰対象を傷つけようとしている人間なのだった。

私はアルベディアンとして、その信仰対象の大切さを、誰よりも熟知していた。だから逆に言えば、それを傷つけようとしている陽子の罪深さをも、誰よりも重く知っていた。

しかもこの陽子は、私がどうしようもないほど、恋しく思っている人なのである。そんな人が、私の眼前で、大きな過ちを犯そうとしているのである。

なのに、自分がここで黙ってしまっていいのか？　それは、あまりにもひどい自己矛盾なのではないか。

自己犠牲的な決意

たしかに当時の私には『アトラス』を、本当の完成に導くという使命があった。

これは言わば、神さまとの約束である。だから本来、これよりも大切な務めは存在しない。そして、その務めを果たすには、どうしても『アトラス』を執筆するための時間を、確保する必要がある。

しかし、私が最終的に出した結論は、神さまとの約束を反故にするものだった。すなわち、

「陽子に結婚したいと言おう。そうして陽子と結婚できたならば、彼女の子供を生み育てるために、アルバイトではない正業に就こう。それによって『アトラス』を執筆する時間がなくなっても」

というものだった。

すなわち私は「たとえ神を裏切ってでも、陽子のことを救おう」と決意したのである。

それは自己犠牲的な決意であると言える。なにしろ私は、アルベドの悟りにより、神の力の強大さを、肌身で感受している人間なのだから。

私にとって神は、たんなる概念などではない。多くの人にとっては、ただの概念に過ぎない神が、私にとってはそうではない。それは私に対して強大な力を振るう「生ける神」なのである。

そういう神の存在を感じている人間が、その神との約束を、投げ捨てると言っているのだ。そのとき私に何が起きるか知れたものではない。

であるのにそのリスクを受け入れるというのだ。それは相当の「自己犠牲的な態度」であると言えるだろう。

狂気を求める

とはいえ正気の人間が、そんな果敢な勇気を発揮できるものではない。

だから、そのとき私は、自分のなかに狂気を求めた。それは「神と結びついている」という安寧を捨てられるだけの狂気だった。

またそれは、現実世界の中で「愚か者」にしか見えなくなるはずの自分を受け入れられる「勇気としての狂気」でもあった。

このときの気持ちが表れている、二つの詩を掲げよう。

《われにくだれ！》

狂気よ、われにくだれ！　　いますぐに。

賜られたお前が自分に向けられたとき、それは人格を崩壊させる爆弾となるが、賜られたお前が誰かに向けられたとき、それは、人間の限界をこえた愛になる。

愛よ、私を満たせ、未来に何かを残せ。

《人に仕えるために》

君の目に、僕が世にも愚かしいものとして映るならば、それは、どれほど喜ばしいことだろうか。それこそ、いま僕がもっとも強く望むものだ。

　あらゆることから囚われるのを嫌がって、むかしは、目をつぶって口づけすることも出来なかった。
　そうした瞬間に、自分が彼女に仕える者となってしまいそうで。そうした瞬間に、男としての優越をすべて失ってしまいそうで。
　けれど今は、目をつぶったままに、人に仕えてみたいんだ。体面を顧みる目をすべて失うまでに、愚かしいまでに人を愛してみたいんだよ。

馬鹿みたいなテスト

　この詩を書いた夜、私はマスターベーションをした。陽子を想像して。いや、むしろ「他人の男の子供を宿した女を想定して」と言った方が正確だろう。
　それは、自分の中におけるテストだった。
「彼女を想像して、欲情することも出来ずに、ただ萎えてしまうだけなら、それは『陽子を女として見られない』ということだろう。
　そうであるならば、プロポーズなどしても、それは単なる欺瞞だ。相手に失礼なことだ。もし精子が出ないのであれば、陽子にプロポーズすることは取りやめよう」
　私はこのように考えたのである。
　それにしても、こんなにも苦しい、マスターベーションがあるだろうか。まるで精液の代わりに、血を放出するかのような思いだった。
　紛れもなく、それは戦いだった。長い、長い戦いだった。
　しかも、その間抜けな姿たるや、ほとんど正視に耐えないものがある。本当に辛くて馬鹿みたいな、けれども真剣な夜だった。

（３）残酷な聖職者

父親になりたい、という言葉

　たしか、陽子に告白しようとしたあの日から、三日が過ぎていた。私はあらためて彼女の前に立ち、こう言った。
「君が好きなんだ。君の子供の父親になりたい。だから、どうか中絶はしないでほしい。一日中働いてでも、俺が君と子供の生活を守ろう」
　今思えば、じつに滑稽この上ない台詞だと思う。馬鹿くさいとさえ思う。
　しかし、当時の私にとっては、これは紛れもなく「自分のすべてを投げ出してでも、陽子を助けようとした決意の言葉」だった。
　もちろん、私の言葉を聞いた陽子は、呆気にとられるばかりだった。なにしろ私は、それまで陽子に「好き」の一言も伝えていなかったのだ。しかも、その素振りさえ見せてはいなかった。
「え、え、何を言ってるんですか？」
　私は、そう言う陽子の目をまっすぐに見て言った。
「君に付き合っている人がいるのは分かっている。なにしろ妊娠するぐらいなんだから。
　でも君は、その妊娠した子供を生むことができない。当たり前のことが出来ない。そういう二人の関係が、君にとって幸せなものだとは、俺には到底思えないんだ」
「……」
「俺だったら、君と、君の子を絶対に守るだろう。それを自分の人生の目的にするからだ。俺だったら、君に中絶なんかさせない。絶対に」

大人びた表情

　よく覚えているのだが、それまで呆気にとられていた陽子の表情は、そのとき急な変化を見せた。
　すなわち、その目つきが、まるで少女から、老女のそれのように変わったのである。それは老成した女性が、未熟な若者をたしなめるような、妙に優越的な目つきだった。
　落ち着き払って、陽子が言う。
「こんな私を好きって言ってくれて、ありがとうございます。でも、私にそんなつもりはありません」

陽子は、明らかに私を子供扱いしていた。私に、若者特有の「世間知らずで空回りする、未発達な熱意」を見ていたようだった。私は胸が痛くなった。
「そういうのじゃないんだ。違う……君は、自分が何をしようとしているのか、分かっていないんだ。君は、取り返しがつかないぐらい、大きなものを壊そうとしているんだよ」
だが陽子には、私の言葉を理解しようとする気配すらなかった。
「……あなたが、いい人だってことは分かります。でも、きっと現実は見えていないんじゃないですか。
私は、あなたが思ってるより、ずっと汚い女なんです。誰かに好きと言われる価値のない女なんです」
そう言って、陽子は私の前から去っていった。

分かっていないのはどちらか

私は自分の無力さに歯噛みしたが、陽子が、この事態の本質を理解していない事だけは分かった。私に言わせれば、現実が見えていないのは、彼女のほうなのだ。
私の方は、神秘体験を通して、アルベドの母性原理が、どれほどの価値を持っているかを、肌で感じていた。だから、それを貶めたときに、どれぐらいの反作用が、当事者に押し返されてくるかも推察できた。
そればかりではない。「胎児を中絶する」ということは、結局のところ「人を殺す」という事ではないか。よって、そこに大きな罪が生じるのは、当然のことであろう。
しかも、どう考えたって、その罪を背負いきれるほど、陽子の心は強くない。
もし実際に中絶を行えば、きっと彼女は、自分がしたことを忘れようとするだろう。おそらく、必死になって「何も無かった」「何事もなかった」と、思いこもうとするだろう。

メサイア・コンプレックス

しかし、そんな試みはまず成功しない。
表面上、いったん中絶のことを忘れられたとしても、彼女にはやがて「得体の知れない恐怖心」のようなものが襲ってくる。それは時に、人を精神病にするほどの、あの「深層意識の力」である。
その「得体のしれない恐怖」に翻弄されて、ついに彼女は、その心を壊してしまうのではあるまいか。私には、そのように予想せざるを得なかった。私には陽子が「そのような過程を辿る素質」を持っているように感じられたからである。
この推察が正しいかどうかは、もちろん断定できない。しかし、私の目に映る陽子は、たしかに、きわめて不安定で、まだ幼い子供のような心の持ち主だったのである。
（だから、彼女の中絶を止めなければならない。彼女が罪に染まりきる前に、陽子の心を助けなければならない）

そう私は思った。
こういう心情を、心理学では「メサイア・コンプレックス」と呼んでいる。メサイアとはメシア、救世主のことだ。
つまり私は、文字通り「陽子を救わなければならない」という気持ちで一杯になってしまったのである。

すり替わっていく気持ち

だから私は、その後も陽子に「中絶をやめてほしい」と言ったり、「それは罪なんだ」と言ったりした。ときに彼女を責めるような態度も取った。
それは紛れもなく、それ自体が、陽子に恐怖を与える言動だった。一種の脅迫だったと言ってもいいだろう。むろん私だって、そんな事をしたくてした訳ではない。
しかし、その脅迫によって、陽子が中絶を断念してくれたならばだ。そのときには、陽子が失うものも、陽子に与えられる反作用も、どちらも「実際に中絶した場合」よりは、ずっと目減りしてくれるはずなのだ。
「だとしたら、いま自分が取っている、この後味の悪い言動にも、それなりの意義があるのではないか」と、そのように私は思った。
だが、実のところ、そこには一抹の虚偽が入り込み始めていたのである。
というのも、そこには、
「俺のことが好きでなくて構わない。ただ中絶だけはやめてほしいんだ」
ということを言い始めた私がいたからだ。
そのように言う私の中では、陽子への恋心は、すでに二の次になっていた。とすれば、あの苦しかったマスターベーションもまた、本来の意義を失っていた。

知らず知らずに犯す罪

明らかに私は、聖職者きどりで陽子に対していた。陽子を愛する男として、彼女に向き合っていたのではない。だからそこには、一種の他人事の冷たさが宿っていた。
きっと私は、本質的には、疑似的な神父や牧師として「職務遂行上の義務」を果たそうとしていたのだった。
つまり聖職者として「今まさに、悪しき道に踏み迷わんとしている子羊」の足を止めようとしていたのだ。
するとここに、ある目に見えにくい「罪」が生じることになる。
有名なクリスチャンである内村鑑三の言葉に、その見定めがたい罪をあぶりだすような一節があったので、ここに記しておこう。

〔聖職者は〕その信条、その神学の擁護のためには、ある時はいかなる罪をも犯して憚らないのである（中略）彼らは教条、その神学のためには、あらゆる他のものを犠牲に供して厭わない。

その結果は知らず識らず恐ろしき罪をも犯すに至るのである。

内村鑑三『ヨブ記講演』より

事実私は、アルベドの真理を守るために、残酷にも、陽子の恐怖心を利用しようとしていた。彼女の恐怖心を癒そうなどとは、いっさい考えなかった。

まさに知らず知らずのうちに私は、内村の言う「恐ろしき罪」を犯そうとしていたのだった。

第３章　暁闇の淵

（1）最も暗い夜

中絶の決行

私は聖職者よろしく、迷える子羊である陽子を教導しようとした。しかし、子羊の足取りは止まらなかった。すなわち、陽子の中絶手術は、ついに現実のものとして決行されてしまったのである。

もっとも、徹底的に彼女の中絶を引きとめていた私に、陽子がわざわざ「中絶しましたよ」などと報告してくるはずはない。それは当然のことであろう。

私が陽子の「中絶情報」を得た経緯は、例によって高度な「運命のやりくち」によるものだった。

ここにまた、私の姉が登場する。

私に三人の姉がいることは、すでに第一部で述べたとおりだ。

その三人のなかの次女が『月に待つ女』で、妊娠と出産を果たしていた姉。そして長女が、その病気（乳癌）のために、妊娠出産を止められていた姉だった。

今回登場するのは、彼女たちの妹。つまり我が家の三女である。

不思議なもので、彼女もまた、この時期に妊娠をしていた。しかも、すでに臨月を迎えていた。そのため実家近くの産婦人科に入院していたのである。ちなみに次女がリカを産んだのも、この産婦人科だった。

私は姉（三女）を見舞うため、足しげく、この病院に通っていた。

陽子の後ろ姿

そうした産婦人科内での出来事である。病院二階にある、入院病棟にゆくために階段を昇っていた私は、そのとき何となく一階の待合スペースを眺めた。

そこは外来受付に隣接している、ソファが並んでいるエントランスである。そこには多くの患者たちが、静かに自分の順番を待っている姿があった。

そして私は、ここに陽子の後ろ姿を見出したのである。私には、後ろ姿だけでも、その人を陽子であると判別することが出来た。

とはいえ、待合スペースには、妊婦や生理不順の女性が、ひしめき合っているのである。そんなところで陽子に話しかけることは、さすがの私にも出来なかった。

私は階段を昇りきり、そのまま姉の病室に入っていった。そして、

「いま一階で、知り合いの女の子を見たんだけど」

　と、私は姉に話しかけた。ところが、それに対する姉の応答が、まさに衝撃的だったのだ。
「じゃあ、中絶の手術かもね。ここの産婦人科は、火曜日と木曜日が、中絶手術をやる日だって決ってるのよ。今日は木曜日だから」
（じゃあ陽子は……）
　私は、自分の心臓が、大きな音で早鐘を打つのを聞いた。思わず病室を出て、一階の様子を見に行った。けれどもその時には、すでに陽子の姿は、待合スペースから消えてしまっていた。

手術の二日後

　その二日後のことである。私はアルバイト先（ビデオ・レンタル店）で陽子に出会った。私は胸をなでおろして彼女に言った。
「ああ、よかった。ここにいるってことは違ってたんだ」
「何がですか？」
「ああ、中絶の手術を受けたのかと思ってさ。でも、手術してたら、さすがに、まだここに来られないもんな」
　それを聞いて、陽子の顔色が、見る見るうちに青白く変わっていった。
「手術とか、なんで……」
「病院で君の姿を見たんだよ。てっきり中絶してしまったのかと思った」
「産婦人科ですよ。病院で見るとか、そんな事ってありえます？　つけてたとか？　怖いんですけど」
　私は呆れて言った。
「そんなに暇じゃないよ。家なんか知らないしね。まあ誰かに尾行されてたら、確かに、それはそれで怖いだろうさ。でも、実際の事情のほうが、もっと怖い」
「もっと怖い？」
「だって、俺の人生なんか、こんなのばっかりだもん。あり得ないタイミングで、あり得ないことが起こる。出来すぎた偶然の連続というかね。
　もう、誰かに運命を操られてるとしか思えない。逆に言えば、そういう事ができる、すごい力が存在するんだとも言える」

強大なアルベドの力

　陽子は不満げだった。
「そんなの、あたしには関係ないでしょう」
「いや、関係ない人なんかいないんだ。気づいてないだけで、どんな人間の背後でも、こ

の大きな力が働いてる。もちろん、君の背後でもね。俺はたまたま、その力に気づきながら生きている、というだけの話なんだ」
「そんなの信じられないです」
「それでも信じたほうがいい。これは事実なんだから。しかもだ、君が中絶によって傷つけようとしているのは、まさに、この力（アルベド）の一部なんだよ。実際に中絶なんかしたら、ほんと、どんな反作用が起こるか、知れたもんじゃない」
　そんな私の言葉に、陽子は黙りこくった。
　きっと陽子は、私が言っていることを理解してはいないだろう。だが、理解できなくとも、今回のこの不思議な偶然性が、陽子の中絶を止める、何らかの契機になるかもしれない。それは私の望むところであった。
　しかし、そのとき私は、陽子の体に一つの異変があることに気が付いた。陽子が生臭いのである。

血の匂い

　それは、どこかで嗅いだことがある匂いだった。しかし何とも言えない、不愉快な感じのする匂いだった。
（あっ、これは血の匂いだ！）
　と気づくが早いか、私は直ちに陽子に問いただした。
「まさか、もう手術を受けたのか？」
　陽子が頷く。私は捲し立てた。店のレジに立っているというのに、とても冷静ではいられなかった。
「なんでだよ！　だって、そうしたら、ほとんど日にちが経ってないってことだろ。俺が病院で君を見たのは、一昨日のことなんだから。なんで手術をした二日後に、立ち仕事なんかしてるんだよ！」
「今日は、どうしてもシフトを変えられないから、って店長から言われて。だって、中絶のことなんか言えるわけないし……」
「馬鹿か、あとは俺が何とかするから帰れ！」
「大丈夫です。怪しまれたくないし……」
　陽子はその後も「どうしても」と言って仕事を続けた。
　しかし、彼女が無理をしているのは明らかだった。
　何より私は、彼女のズボンの中で滴り落ちているはずの、鮮血を想像してゾッとなった。そこでは、なまじのナプキンでは吸いきれないほどの、大量の血が流れていたに違いない。
　このとき私は、陽子の悲しい精神構造を見たような気がした。
　それは「自分を守ること」よりも、「他人の要求に応えること」をはるかに優先してしまう、というものである。そうでなければ、店長の言うことを聞いて、手術の二日後にレジに立つなどする訳もない。

　そして私は、そんな陽子の心に対して、何とも言えない悔しさと、憐れみとを感じたのだった。

（2）悲しみの底

無力な自分を噛みしめる

こうして、私が「陽子の心を守りたくてしたこと」「自分の信仰の対象を守りたくてしたこと」の全ては、無駄になってしまった。

私が最終的に「彼女に与えたもの」といえば、結局のところ、不愉快さと恐怖心だけだったのではあるまいか。それ以外のものは、何ひとつ思い浮かばない。

私自身の気持ちはどうかと言えば、とにかく、自分の無力さに反吐が出る思いだった。そして悔しくて悲しくて、どうしようもなかった。

この時の心情を綴った詩が残っている。

《傲慢な幻想》

僕が、人に対して何かしてやれるなど、ああ、なんと傲慢な幻想であったことか。

僕に愛があったならば、どうして彼女を助けるだけの、それだけの力ある自分を、これまでの人生の中で築いておかなかったのか。

僕は、虚偽をあらわした。彼女を助けると言ったから。僕は、偽善をあらわした。彼女を救うと言ったから。

僕に力はない。僕は、ただ何かをしようとしただけだ。何をすることも出来ないくせに。

この頃、私は家で「ちくしょう」「ばかやろう」といった言葉を、ずっとブツブツ言っていた。黙っていることが出来なかった。心の内側だけでは、自分の悲憤を、整理しきることが出来なかったのである。これには、さすがに親も心配していた。

またアルバイト先では、接客業であるのにも関わらず、陰鬱そのものの顔でもって仕事をしていた。それは社会人として許されることではないが、それでも、自分ではどうしようもなかったのである。

よくある話という言葉

私のただならぬ表情を見かねて、同じアルバイト生の女性が、こう話しかけてきた。
「誰も気づかないけど、あなた陽子ちゃんのこと好きよね」
この女性は、私よりも七歳ほど年上である。私は一時期、お姉さん的な親しみと共に、恋愛感情にも似た思いを、彼女に抱いたことがある。
もっとも、そこに陽子が現れたので、すぐさま、この思いは立ち消えてしまったのだが。
とはいえ彼女は、今なお、少なくとも好ましい人ではあった。また、私が陽子に好意を寄せていることを、アルバイト先で唯一気づいたぐらいの敏感さを、持ち合わせた人でもあった。
ところが、その女性が、このとき、まるで刃物のような言葉を口にしたのである。
「でも、そんなに気にするようなこと？　　よくある話じゃない」
私は、脳天をかち割られたような気がした。
どうやら彼女は、陽子の中絶のことを知っている。その上で「中絶の話なんて、どこにでも転がっている」と言っているのだ。
確かにそうかもしれない。しかし、よくある話ならば、それはイコール、大した話ではないというのか。そこには本物のイコールがあるというのか。

メフィストーフェレスの囁き

陽子は、私の信仰対象でもある「神の体」を傷つけた。その神は、無限にして永遠の神である。その神は「時空そのもの」「存在そのもの」でさえある神である。
彼女はその神の一部を、中絶という形によって破損した。これは明らかな瀆神行為である。
そのために彼女は、怒れる神から、どれほど大きな罰（反作用）を受けるか分からない。どれほど深刻なダメージを、その柔弱な心に受けるか分からない。
それだというのに、これを「よくある、大したことない話」などで片付けてしまってよいのか。
（メフィストーフェレスめ！）
私の脳裏に、ゲーテの『ファウスト』の一場面が浮かんだ。出産した我が子を、狂気の果てに殺してしまったマルガレーテ。そんなマルガレーテの前に、ファウストとメフィストーフェレスが現れる「獄舎」の場面である。
マルガレーテは、ファウストの恋人だった。それだけにファウストは、目の前の恋人の悲惨さに対し、悩乱せずにはいられない。
だが、そのファウストに、悪魔メフィストーフェレスが、ほとんど軽々しい調子でもって囁くのである。
「何もあの女が、最初の一人という訳でもありませんさ」

この台詞を聞いたファウストは、激高してメフィストーフェレスを責め立てる。いまの私には、そんなファウストの気持ちが痛いほど分かった。

罪深き時代

そもそも、神を持たない人間（もちろん悪魔も）は、人間の倫理でしか物を見れない。そして、その人間の倫理性とは、結局のところ「多数決的正義」に行き着くしかない。

ということは「よくあること」「多数あること」は、ひとつの社会的正義（＝許容事案）となる。少なくとも、人から後ろ指をさされるような事ではなくなる。だからそれは「大したことではない」のである。

しかし、信仰によって神を持つ者や、神の臨在を感じずにはいられない者（＝私やファウスト）にとって、それは単なる欺瞞である。

我らにとって、神の前に罪であることは、あくまでも、どこまでも、どれだけの人数がしようと、終始「罪」でしかない。

しかも人間は、そのとき無力である。この罪を贖う力があるとすれば、それはただ一つ、神の偉大性のみなのだ。だから罪ぶかき人間は、その神の許しを恃むことしか出来ない。

しかし神は、容易には、その優しい姿を見せてはくださらない。ここにこそ、真実の「人間の苦悩」があると言っていい。

なのに、その苦悩を「よくあること＝大したことではない」などという浅薄な倫理であしらわれた日には、私たちにとっては、ほとんど侮辱を受けたも同然である。

その「よくあること＝大したことではない」は、真実「神を持たない者」だけに通用する慰めだからである。

むしろ、そんな欺瞞で慰められるぐらいなら、ずっと悲嘆に暮れていたほうが、まだしもマシというものだ。そのほうが、よほど真実を見失わずにいられるだろう。

神から離れた時代

加えて、私には、もう一つの重大事が理解できた。

「そうか、ここは、こういう悲しいことが『よくある』世界なんだ。あるいは『よくある』時代なんだ。つまり世界と時代そのものが、神の心から離れてしまっているという訳だ。

だとしたら、罰を受けるのは陽子ばかりではないのだろう。遠からず、世界と時代そのものが、報い（反作用）を受けることになるのだろう」

と、このような考えが浮かんだのである。そして、もしそれが事実なら、陽子という女性は、この「神から離れてしまった世界と時代」の象徴的存在になるかもしれない。

（3）詩が生まれるとき

澄んだ目が悲しみを眺める

ともあれ、私は何も出来ないまま、結局陽子を、中絶という最悪の結果に辿りつかせてしまった。まことに痛恨の極みだった。

しかしながら、ここに到っては、私はもう、中絶を阻止するために、肩をいからせて陽子に接する必要もなくなった。それも一つの「確かな事実」だった。

つまり私のもとに、一種の心の静けさが訪れたのである。

《祈りのむくろ》

そこにあるのは祈りの残骸、叶わなかった祈りのむくろ。

しかし、むくろはやがて大地となり、新たな若芽が、そこから萌える。

風に吹かれて鳴る葉音を聞いてよ。祈りという若木が、新生の名のもとに、死者の無念を愛に昇華している。

この詩が持っている穏やかさが、確かに、そのときの私の心にもあった。シニカルに見れば、単に「気が抜けた」とも言えるだろう。

しかし私にとって確実に、ある一定の冷静さを取り戻す機会にはなった。それは紛れもない事実である。また、冷静になったぶん、周りの状況が、クリアに見えるようにもなった。

つまり、この時を境にして、私の視界が「波紋をなくした水面」のように澄んだのである。

そして、そうなったとき、私の前に最も大きく映し出されたのは、他でもない、陽子自身の悲しみだった。

陽子の孤独

陽子はきっと、恋人（子供の父親）には、何も言っていないに違いない。すべてを自分だけで抱えて、たった一人で、中絶という地獄を経験したのだ。

どんなに孤独だったことか。どんなに寂しかったことか。

しかもその中絶は、私が反対し、ときに責めた中で決行されたものだった。陽子の不安は、さらに高まったはずだ。

しかも、今となっては、どんなに後悔したとしても、後戻りはもう絶対に出来ないのだ。彼女が捨てた命は、もう二度と戻ってきはしない。

そして、本性的に生命を愛するように出来ている女性にとって「芽生えた命を無に帰した罪悪感」は、なまじっかな誤魔化しかたで忘却できるものでは、決してない。

いま陽子は、暗い孤独の淵にいることだろう。身体も不調だろう。あの日、彼女の子宮からは、どれほどの血が流れたのだろうか。

他人からの要求ばかりを優先して、自分の心身を犠牲にしてしまうなんて、陽子はなんて損な性格をしているのだろう。彼女は、なんと愚かしいのだろう。

けれど私には、その愚かしさを責めることは出来ない。彼女の「損な性格」が、私にはむしろ、いじらしく感じられるからだ。だから、陽子を嫌いになることなんて、なおさら出来はしない。

涙で一つになる

たぶん陽子は、自分を犠牲にしてでも、他人を笑顔にしたい人なのだ。そして、自分の心を犠牲にしても、その蒼みがかった顔に笑みを浮かべようとする人なのだ。

事実、この深刻なドラマで綴られた一か月の間にも、私は何度となく陽子の笑顔を見た。その笑顔によって、私の心が癒されたことも、たしかに何度かあった。

だが、その笑顔の裏で、きっと彼女は、何度も何度も泣いていたのだ。笑顔だったその時も、きっと心の中では泣いていたのだ。

そう思うと、急に苦しくなって、私の目から涙がこぼれた。

しかも、その涙が、自分だけの涙ではない気がした。

すなわち、いつも涙をこらえている陽子の、その「彼女が流すはずだった涙」を、いま自分が「彼女の代わりに」流しているような気がしたのである。

その涙を拭っていると、思わず詩が浮かんできた。

《アマデウス》

君が、モーツアルトをプログラムした演奏会に訪なったならば、楽器から、陽気に澄んだ音色が奏でられたところで、なぜか聴衆が涙を流すのを見ることになるだろう。おそらくは、とても不思議な気分でね。

でも、彼らはおかしくなってしまったんではないんだ。本当に、本当に悲しんでいるんだよ。

「軽きが沈み、重きが浮かびあがる」この言葉は、よくモーツアルトの音楽に冠される。
　彼を無上に愛する者であれば「笑顔の悲しみを知らなければ、笑顔の奥にあるものを見出さねば、お前は、決してモーツアルトを観賞したことにはならない」そうとまで断言するはずだ。

　モーツアルトの心材は寂しい。暗く悲しい。彼は誰よりも寂しがりやで、いつも、細かく震えた息だけで、その幼く小さな胸を満たしている。
　けれど、彼は人の優しさに触れたくて、これを失いたくなくて、誰の前でも微笑まずにはいられない。笑顔を見せずにはいられない。
　彼の唇は笑い、けれども、その目には大粒の涙が浮かんでいる。浮かんでいるんだ。悲しみの涙が、寂しさの涙が。

　その涙は音楽のなかにも滲みわたり、微笑みたる陽気な旋律と楽想のなかに、悲しみを目一杯に満たす。
　僕らが、芸術に人の衷心を聞こうとするのならば、その悲しみを感じることが出来ないことは、すなわち、彼の心を見放したのと同じになるだろう。
　けれど……けれど、誰もがこの幼い青年を愛する。だからこそ、陽気な旋律に浴していながら涙が流れる。

　悲しめばいいじゃないか。悲しみを隠したら、その、本心を隠さなければならぬという悲しさが、かねてあった悲哀の蒼ざめた色合いを一そう深めてしまう。
　悲しいのに、どうして、そんなに明るく振るまうのか。どうして、そんなにも屈託なく笑うのか、って、そう憤って、僕らの目に涙は流れる———君の笑顔を目にする時のようにね。

　笑うな、愛するひとよ。あなたの笑顔を見て、この胸には安堵が走ったのだ。あなたの悲しみが、おそらくはまだ浅瀬にあるものと感じて。
　この眼が、幾度となしに涙を流したことが、滑稽に感じられるほど、君の、一度の翳りも知らぬような笑顔が、この胸に安堵を与えてくれた。
　だから、自分の深刻さ加減の滑稽なことに、僕は笑いさえしたんだ。

　けれど、その日の真夜中、僕はそれまでにないほど激しく泣いた。屈託のない笑顔の後ろに隠れた悲しさを、寂しさを、暗さを、それらを感じることが出来なかった自分が情けなくて。
　流れるモーツアルトが、なんと皮肉な笑みを浮かべていたことだろう。
　———

愛するひとよ、もう笑うな。それは悲しいよ。涙が出るよ、それは溢れるよ。

第 4 章　曙光差す（ルベドの悟り）

（1）重なり合う二つの手紙

手紙の交換

（たぶん今の陽子にとって、私の姿を見ることは、それ自体が、大いに辛いことであるだろう。
　それはきっと、自分がしたことを責められるような、針で刺されるような苦痛以外のものにはなり得ないに違いない）
　そう思った私は、彼女の前から、姿を消すことを決意した。つまりアルバイトを辞めることにしたのである。
　ただしその前に、別離の手紙として、前掲の詩『アマデウス』を陽子に贈ることにした。それは、
「誰か一人でも、彼女の心に寄り添っている人間がいるのだと知れば、きっと陽子の孤独感も、いくらかは癒されるだろう」
　と考えたからだ。
　勤務時間が一緒になったとき、私は詩が入った封筒を陽子に渡した。
　すると驚いたことに、陽子のほうでも、私に手紙をくれた。偶然の一致であるが、形式としては、お互いに手紙を交換することになった訳だ。
　家に帰ってから、私は陽子の手紙を読んだ。それを読むかぎり、陽子も、私を悪い人間だとは思っていなかったらしい。自分を想ってくれたことへの、真摯な感謝が書かれてあった。

同一の内容

　それと同時に、陽子の手紙は「でも私は、あなたが思っているような人間じゃないんです」という始まり方で、自分の本心を吐露してもいた。
　それは、私の情熱を「現実」によって、諌め諭すような内容だった。要するに陽子は、私を「現実が見えていない子供」として扱っていたのである。
　私は、それに対する不満は覚えなかった。むしろ逆に「これは大丈夫だろうか」という不安がよぎった。というのも、陽子の手紙の内容と、私の詩の内容とが、あまりにも似すぎていたからである。
　こと陽子の「本心」を描いた箇所において、それが顕著だった。というより、表現の仕方こそ異なれど、私の詩と陽子の告白は、内容的に「同一」とすら言えた。

そして、この一致、この同一性は、結果的に「凶」と出た。
もともと陽子は、私を「変なことを言っている空論の人」だと思っていた。だからこそ彼女は、中絶を制止しようとする私を、あんなにも見事に無視することが出来たのだ。
つまり陽子は、私の言葉をして、それを「現実味がなくて、取り合う価値もないもの」と信じて疑わなかったのである。

リアリストの観察眼

ところがである。もう後戻りが出来なくなったここに来て、突如として陽子には分かってしまったのだ。私が、ものすごい精度でもって、現実を見つめられるリアリスト（現実主義者）であることが。
なにしろ私の筆は「誰にも見せたことがない」陽子の心を、その実際のところと寸分違わず、精確に描出していたのだ。
であれば、私の「現実を把握する力の強さ、その観察精度の高さ」は、彼女自身が一番、身に染みて解り得たに違いない。
そうだとすれば、この流れから陽子は、
（じゃあ、あの人の目は本当の現実を見ているの？　だとしたら、神さまは本当にいるの？　中絶したことは、ものすごく悪いことなの？　私は罰せられるの？）
と思わずにいられなかっただろう。ちなみに実質的には、この極度の不安こそが、すでに「彼女に対する神の罰」であったことだろう。
こうした異様な事情があったために、手紙の交換をしてから「初めて」私が会った陽子は、ほとんど顔面蒼白の極みとなっていた。
レジのカウンターで彼女は、恨みとも恐怖ともつかない表情で、私に言った。
「お前は何者なんだ？」
それはまるで、人が宇宙人を前にしたときのような言葉だった。未知の世界からやってきたエイリアン（異邦人）に対する恐怖が、そこには込められていた。

運命を定められている者

その陽子の反応は、ある意味で、極めてプリミティブ（原初的）な宗教的感情の表出でもある。あるいは、この世的なものを超えた「何か」を前にしたとき、多くの人が見せる宗教的反応とも言える。
とはいえ「それを信じていないときには侮蔑し、信じざるを得なくなったときには恐怖する」というのは、本当に何万年もの昔から繰り返された「民衆的な」宗教的反応であろう。
そのため、はるか遠くの記憶が甦ったかのように、私の心の奥のほうで「またか！」と

いう言葉が響いた。

　もちろん確証はないが、もしかしたら私は、この世に生まれてくる度ごとに、こうした無粋な状況に出くわしてきたのかもしれない。

　ともあれ、恐怖心を露わにした陽子の様子に、私は、言い知れぬ寂しさを感じた。そして彼女の「お前は何者なんだ？」という質問に対しては、ただの一言しか返答できなかった。

「俺は……たぶん、神さまから運命を定められている人間だよ」

　陽子もまた、それ以上は何も問うことなく、私の傍から離れていった。

（2）ルベドの悟り

私がいなくなっていました

すでに述べたように、陽子の手紙と、私の詩の内容は「同一」と言ってよいものだった。

これは端的に言えば「陽子の心と、私の心が重なりあった」ことを意味する。あるいは「私の心が、陽子の心まで届いた」という言い方もできるだろう。

しかし、陽子の手紙に書かれてあった、次の言葉だけは違っていた。

それは唯一、私の詩には無かった言葉だった。そして、だからこそ、私に大きな印象を与える言葉となった。そこには、こう書かれていたのである。

「私はピエロになっていました。いつのまにか、私がいなくなっていました」

この一節が、おそらくは、陽子の手紙の中核部分である。

しかし、私がいないとは、どういうことだろう。彼女がいないのなら、では陽子とは何なのだろう。陽子という人格は、一体何なのだろう。

突き詰めて考えれば、答えは一つしかなかった。それは「虚無」である。陽子という人間の個性は虚無なのだ。

虚無としての陽子

陽子はこれまで、自分の主体性を犠牲にしながら、ひたすら他人の意向の中で生きていた。それが彼女の、基本的な生き方だった。私には、そのように思われた。

あの日も陽子は、血を流しながらも、店長の意向どおりに、レジに立っていた。あの悲しい姿が、彼女の人生を、ありありと象徴していた。

そんな陽子は、他人の意向や意見に従っているうちに、自分自身の主体性と存在感を、すっかり見失ってしまった。

これを心理学的には、外向性への過適応による、自己喪失として診断することが出来る。

結果的に陽子のもとに残ったのは「虚しいまでの無、虚無、何者でもない自分」だった。

すなわち「私がいなくなっていました」と告白せざるを得ないような「虚ろな自分」だった。まさに自己喪失感の極みと言い得よう。

これには、手紙を読んでいるほうの私も、胸が抉られるような思いがした。読んでいて本当に「苦しい」と思った。陽子の苦しみが、私に覆い被さったかのようだった。

しかし、その反面で私は思ったのである。
「たぶん、こういう女性だからこそ、俺は陽子を好きになったんだろうな」と、そう。それは不思議なぐらい確信めいた気持ちだった。

悟りを与えられた夜

その日の夜、私にルベドの悟りが与えられた。ルベドの悟り――それはアルベドの悟りを軽く飛び越してしまう、恐ろしいほど包括的で、仰ぎ見るほど崇高な悟りである。
しかし、その悟りを受け容れている私の様子は、決して大仰なものではなかった。私はそのとき、ただ「ああ、うん」と呟いただけだったのだ。
しかも私は、まったく冷静ですらあった。なぜというに、そのとき私は、ただ世界の「ありのままの姿」を見ただけだったからである。
事実そこには「何かが誇張されて、それが観る者を驚かす」という要素は何もなかった。他方の「アルベドの悟り」には、間違いなく「光というファクターの部分的誇張」があったのだが。
それに比べて、ルベドの悟りには、ごく自然な形で、世界の全てが収まりきっていた。
むしろ僅かでも誇張などがあったら、ルベドの悟りは成立しなかっただろう。
まことにそうである。インパクト的には物足りなさが残るかもしれないが、真の悟りとは、不思議とそういうものなのだ。
とはいえ、これを体系的思想として焼き直せば、一転してそれは、荘重広大な大叙述となる。
このように言っても、決してオーバーにはなるまい。なにしろ、あの長大な『ヘルメスの杖』の全体が、すべて「ルベドの悟りについての説明」と言えるのだから。
すでに第二・第三福音書を読了されている方には、きっと、この言葉が持っている「重み」が伝わっていることだろう。
しかも、かかる『ヘルメスの杖』は、本質的に、本来あるべき叙述のダイジェスト版なのである。
つまりあれは、ルベドの悟りについての解説を、出来得るかぎり、切り詰めて表現したものなのだ。
もしもルベドの悟りを、本来的な規模で叙述しようとすれば、いったい何十巻の書物が積み重なることか。
想像すると、書き手として少し怖い感じがするほどである。

（3）光と闇の結婚

ヒエロス・ガモス（聖婚）

ルベドの悟りとは、本質的に「光と闇の合成」であり「無限と虚無の弁証」である。

そして、これら「合成」や「弁証」を、人間的な象徴に焼き直すならば「結婚」という言葉以上に相応しいものはない。

そして、この「光と闇の結婚」「無限と虚無の結婚」は、きわめて神秘にして神聖な婚礼である。

したがってそれは「聖婚」と呼ばれて然るべきだろう。ギリシア語では、これを「ヒエロス・ガモス」と呼びならわしている。

ただし「聖婚 - ヒエロス・ガモス」というと、一般的には、アルベド（座標 9）か、混在的一者（座標 1）を象徴するイベントとして周知されている。

そこでは、去勢された男性神が、大いなる母神と一体になる。

あるいは、柔弱な美少年が、偉大な女神に愛されて、彼女に囲われて生活する。そういった形でのヒエロス・ガモスが行われる。

こうした男女の形式をもった婚儀が、一般に「聖婚」とされているのである。

いま挙げた例のどちらにあっても、そこで優位になっているのは「女性」あるいは「女性原理」である。

逆に男性原理は、その母性原理の内部（子宮）に回帰するために、胎児化、矮小化といった「劣位への変容」を遂げなければならない。

そして、そのように男性原理が劣位化し、女性原理が最も優位化される座標こそが「アルベド」と「混在者一者」の二つなのである。

なお、かかる聖婚の具体例としては「アッティス - キュベレー」「アドニス - アフロディーテ」「ファウスト - 栄光の聖母」のペアなどが挙げられるだろう。

ルベドの聖婚

しかし「ルベドの段階における聖婚」は、もはや、そのような形式を取る必要がない。

というか、そもそも上記のようなヒエロス・ガモスならば、私はアルベドの悟りを得たとき（二一歳）、すでに、その婚礼儀式を済ませてしまっているのである。

読者にあっては、どうか「月に待つ女」の第 6 章を振り返っていただきたい。

確かにあのとき、私は、胎児のように矮小となり、偉大なる母性原理（アルベド）の子

宮へと回帰した。そして、それこそが、一般的な意味合いにおける「聖婚」「ヒエロス・ガモス」だったのである。

それに対して、ルベドにおける聖婚は、もはや男女という性別を超えてしまっている。また、人間であることをも超えてしまっている。

それはもはや、普遍抽象的な「無限」と「虚無」の結婚なのである。

そう、今回は、たまたま人であり男性である私が「無限」を持っていて、たまたま人であり女性である陽子が「虚無」を持っていた、というだけの話なのだ。

つまり私たち二人は、実質的には「無限」と「虚無」の乗り物にすぎなかったのである。

存在の原理

少し詳しく見てゆこう。

私が二一歳当時に体験していた「アルベドの悟り」は、空間的に見れば「無限」を意味していた。無限のうちに含まれない存在はないので、この「無限」をして「存在の原理」と言い換えることが出来る。

言うまでもなく、この「存在の原理」は人類にとって偉大な原理である。

しかし、この「存在の原理」は、自身がそうやって存在している「根拠」を示すことは出来ない。つまり自分が「どうやって、何によって、そうやって存在できているのか」を提示することが出来ない。

それは、ただ唐突に、ただ既成事実的に「もう存在していた」のである。

これはもちろん、かかる「存在の原理」の乗り物である、私の心理内容にとっても同様の事情である。それは私の悟りの内容そのものだった。

創造の原理

しかしだ。私は、そこに陽子との関りを通じて「虚無」を取り込んだ。

そして私は「存在」と「虚無」とを、無意識のうちに合成した。それによって「虚無の一点から、無限の存在が創造される」というヴィジョンを得た。

これこそ「無からの創造」だった。天地創造の業をなす「創造神」の姿だった。

それはまた、夜の闇（虚無）から光（存在）を生みだす、暁の太陽の真理だった。

さらに、そうした深紅の太陽によって象徴されるため、ルベド（赤化）と呼ばれるようになった、究極的な「錬金術的グノーシス」だった。

そして、アルベドの「存在の原理」は、このルベドの真理によって、自分が存在している「根拠」を獲得した。このルベド――別名「創造の原理」という真理によって。

つまりアルベドは、いまや自身を顧みて、次のように言えるわけである。

「私という『存在』は、無から創造されたから、ここに存在しているのだ」と。

そして、そのように言えるようになった時点で、すでにアルベドは、ルベドへと昂進されているのである。もちろんそれと同時に、私もまた、アルベディアンから、ルベディアンへと進化していた。

テーゼがアンチテーゼを求める

陽子から虚無を取り込むことによって、私は以上のような真理を観ることが出来た。換言すれば「陽子と結びつくことによって」である。

それはまさに聖なる婚儀であり、男、女、人間を超えた、抽象的な「聖婚」である。

（ああ、だからなのか。だから女性への関心を失っていたのに、私はあんなにも陽子に、恋焦がれたのか……）

このとき私は、すっかり神仕組み（＝運命）を解き明かした気持ちになった。

要は「私のなかの無限が、陽子のなかの虚無を求めていた」というだけの話なのだ。今回の神仕組みの中では、私たちの人格や感情など、完全に二の次だった。

つまり、私の中にあるアルベドの悟りが、自律的に、自己のアンチテーゼであるところの虚無を求めた、ということである。

そればかりか、さらに虚無と絡まり、重なりあうことで、自身が「ルベドの悟り」へと昂進することを欲したのである。

そうした摂理が、私の恋愛感情を「運命的な強制力」として、背後から見事に操っていた。

だからこそ私は、あんなにも急速に陽子に惹かれていった。あんなにも陽子を愛さずにはいられなくなった。そういうことである。

必然の悲劇

上述したように、私は、無意識のうちに、まさに運命に操られるようにして、自分の「悟りの進展」を求めていた。

そんな私にとって、虚無を隠し持った陽子は「どうしても関わらなくてはならない女性」だった。

また彼女との一連の出来事は、私にとって、虚無を吸い尽くすために「どうしても演じなければならない悲劇」だった。

しかし、それが分かったとき、この胸にこみ上げてきたのは、どうしようもないほどの悔しさだった。

（ああ見事だよ。ものすごく見事な、運命の操り糸だと思うよ。その演出力には脱帽するしかない。

でも、これじゃ陽子は生贄じゃないか。俺の悟りを成就させるために祭壇に載せられ

た、憐れな生贄のようじゃないか！）

私はそう神に訴えた。いや、本当に訴えるべき相手が神かどうかは分からない。聖霊かもしれないし、女神かもしれない。星かもしれない。

とにかく私の運命を操っている者に噛みついた。陽子に対する申し訳なさが、私の心を、暴れ馬のように掻き乱したのである。

このときに描いた詩がある。

《涙の雨》

なんという完成された物語！　だが、演じる主人公たちに、涙を贈らずにはいられない。何だ？　この雨は。これは雨ではない。涙だ。

どうして涙が、この僕に注がれるのだ。内外の世界は重なりあい、真実は一つになった。僕の流した涙が、この身に降るのは、そのせいだ。

第５章　曇れる日

（1）自分の心を知る

アニマ・アニムス

心理学者のユングは「投影と恋愛は異なる」といった内容の言葉を残している。

投影とは、自分では見えない「自分の深層心理の内容」を、外部の人間に投射（＝イメージとして投げかけること）することだ。

そうすることで「実在の人間」と「深層心理の内容」が二重写しになる。そして、これによって、見えないはずの「自分の深層心理」が、ある程度、主体の目に見えるものになるのである。

しかも彼は、これによって「自分の深層心理」と関わることが出来るようになる。

こうした営為の中で、一番分かりやすいのが「アニマ・アニムス理論」だろう。

男性の深層心理は、女性的なもの（アニマ）で満たされている。それに対して、女性の深層心理は、男性的なもの（アニムス）で満たされているという。

しかし、それらは文字通り「心の深い層に沈んでいる」ため、表面意識である、主体の心には見えない。

とはいえ、見えないままでは済まされない。

深層心理（アニマ・アニムス）と関わって、その内容を意識に取り込むこと。それによって、単なる男や単なる女ではない、両性具有的な「人間」になること。

つまり性差を超えた普遍的人間になること――それは「人間の神化」の一過程であり、誰にとっても「昇らなくてはならない梯子」だからである。

投影がつくる魅力

上述のような義務的なシチュエーションにあって、主体が「見えないものを見えるようにする」ために、無意識のうちに行う心の営為。それこそが「投影」なのである。

この投影によって、男性が、外部の女性に、自分のアニマ（深層心理）をオーバーラップさせたとしよう。

すると、その女性は、重要性、特別性において「単なる現実的な女性」を超越した存在となる。

すなわち彼女は「その男性にとって魅力的な女性」「その男性にとって運命的な女性」へと高まるのである。

そうすると男性は、この魅力的な女性に引き寄せられながら、彼女を通して、自分のアニマと邂逅することになる。

そして上手くいけば、その深層心理の内容（アニマ）を、表面意識に取り込むことが出来るという算段なのだ。

正直言って私は「これが恋愛感情の正体だ」と思っていた。しかしユングは言うのである、「そうではない」と。冒頭に掲げたように「投影と恋愛は異なる」のだと。

そして、いまや私は、ユングの正しさを、無慈悲なまでに思い知らされることになった。陽子との関係を通して。陽子が、私の「ルベドの悟り」を開いてくれたことによって。

消失していたもの

それはまさに、ルベドの悟りを得た直後のことだった。

私はこの時を境にして、女性としての陽子に、全く関心を失ってしまったのである。分かりやすく言えば、彼女のことを思い浮かべても、何ら心が動かなくなってしまったのである。

なぜか。要するに、私が欲しがっていたものは、飽くまでも「虚無」であって、陽子という女性ではなかったからである。

アルベディアンであった私は、無意識のうちに、ルベドの悟りを求めていた。

そして、その成就のためには、自分の深層心理に眠っていた「虚無」を呼び覚ます必要があった。ルベドとは「アルベドと虚無の合成」だからである。

そこで、その虚無を投影する相手として、私は「外向性に過適応していた陽子」を選んだ。

もちろん、意識してそうしたのではなかった。だが無意識的であるにせよ、結果的に私は、自分のために陽子を「使った」のである。

かくして私の深層意識に沈んでいた虚無は、陽子との関係を通して、私の表面意識まで浮上することになった。

これによって「ルベドの悟り」が成立する。ついに「虚無からの存在の創造」「無からの創造」が、私のグノーシスとなった訳だ。

そして、この悟りという御用事が済んだとき、陽子という「虚無の容れ物」には、自動的に用が無くなってしまった。

彼女は、私にとって不必要なものとなり、もはや私の関心から離れてしまったのだった。

あえて即物的に、あえて残酷に表現すれば、結局そういうことだった。そして当然、このような心理が、男女の恋愛関係であろうはずがなかった。

（2）陽子との別れ

恐怖心と依頼心

はじめに、ユングよりも二世紀前に活躍した、哲学者ルソーの鋭い言葉を掲げたい。

ほんものの恋といっても、それはいったいどういうことなのか。それは幻影、うそ、錯覚にすぎないのではないか。

人は自分がつくりだすイメージを、それをあてはめる対象よりも、はるかに愛している。愛しているひとを正確に、あるがままに見たとすれば、地上には恋などというものはなくなるだろう。

愛を感じなくなったときには、愛していたひとは、以前と同じままでも、もう同じひととは見えないのだ。幻想のヴェールが落ちると、恋は消えうせる。

ルソー『エミール』今野一雄訳より

そういう訳で、もう私は、陽子を必要としていなかった。

しかし、そのような残酷な現実を、私がアッサリと受け入れられるはずもない。私は、それほどまでに、割り切った人間ではなかった。

むしろ私は、必死になって、現実から目を背けようとした。自分は今も陽子が好きなのだと、自分は今も陽子を必要としているのだと、そう何とかして思い込もうとした。

そこには切実な理由もある。それは陽子が「彼女のほうから」私を頼るようになってきたという事情である。

そこには、あの『アマデウス』の詩によって、私の言説に、真実味を感じるようになった陽子の姿があった。

もっとも「頼る」と言っても、陽子が、それに相応しい率直な態度を示してきたという訳ではない。そのとき現れた事態は、もう少し複雑なものだった。

まず陽子にとって、私が「何か得体の知れない力を持った者」に見えたのは、紛れもない事実である。しかし人間は、そんな相手に対して、ストレートな依頼心を持てるものではない。

陽子が私に抱いたのは、むしろ「恐怖心とない交ぜになった依頼心」である。それは、かなり厄介で、かなり屈折した感情だと言えるだろう。

いや、無理もない。それまで「神も霊も運命もない世界」で生きていたのが、この陽子だったのだ。それが突如として、それと正反対の人間と出くわしたのである。
しかも、その人間の主張するところが「どうやら真実のことらしい」と、思い知らされた。
実際彼女にとって、あの手紙の交換は、本当に、魂の根底を揺さぶられるような「衝撃の経験」だったのだ。それでは、私に恐怖を抱いたとしても仕方ないだろう。

付かず離れず

「怖い。でも本当に頼れるところは、そこにしかない」
「そこに行けば、私は自分の罪を見つめることになる。それは、あまりにも辛い。でも、そこにしか救いの糸口がない」
そうしたアンビバレント（両価値的）な感情が、このときの陽子を支配していた。そして、その両価値的な感情が、非常に矛盾した行動を、彼女に取らせていた。
それはこうだ。陽子はやたら私に近づく。しかし、私が何かシリアスなことを話そうとすると、すぐに私から離れるのである。
いわゆる「つかず離れず」という状態であるが、これを何度も繰り返していたのである。
もちろん私の方にも問題があった。
私は、陽子を癒せるのは、自分しかいないと思っていた。自分は今も、陽子を愛していると信じていた。だから陽子への関心を保つことは、自分の最大義務だと思っていた。
しかし、そのように「義務」と感じていた時点で、それは実際には、もうハリボテの異性愛に過ぎなかったのだ。
つまり形だけがあって、中身はがらんどうになっていたのである。たぶん私は、自分のその不誠実を、心のどこかで看取していた。
だから「自分は陽子を愛しているのだ」というポーズを取るとき、私の言動は、ことさら必要以上の必死さを伴わざるを得なかった。
まるで勇気を失った人が、己の心の弱さを隠すために、かえって大きな声を上げるように。

シーナとの再会

そうした気持ちを象徴するような出来事があった。
というのは、アルバイト先に、あのシーナが来てくれたのだ。大勢いる客のなかの一人としての来店ではあった。人々に紛れての再会ではあった。
けれども私が、彼女を見誤るわけもない。彼女を意識しないわけもない。そして後述

するように、シーナのほうにしても、この来店は、おそらく私に会うためのものだったのである。

しかし、この時期の私にとっては、シーナなど、誰よりも会いたくない相手に他ならなかった。

もし彼女と話をしてしまったら、もし彼女と接触してしまったら、そのとたんに、私の「陽子への想い」が瓦解してしまうのは、ほぼ確実だったからである。

だから私は、このとき、出来得るかぎりシーナの存在を無視した。そうやって陽子への想いを守ろうとした。

少しでもシーナのほうを向いたら、きっと彼女への想いが、陽子への想いを圧倒してしまうに決まっている。

やや脱線するが話しておきたい。

この時から何年も経ってからのことだ。私の「一度シーナが店に来てくれたんだよ」という言葉が、友人づてで、シーナのところまで伝わったことがある。

彼女はそれに対して「気づいてたんだ……」とだけ言ったそうだ。つまりシーナにも、私に気づいてほしいという気持ちがあったのだ。

その気持ちに応えたかったと、今では衷心から思う。しかし、あの時には無理だったのだ。何とも身動きがとれない時に、私たちは再会してしまったものである。

陽子との別れ

それはさておき、私は陽子への関心を保とうとしながら、次第に、それに疲れていった。あの「付かず離れず」のパターンが、なおもしばらく続いたからである。

つまり、陽子は私に近づこうとするが、実際に私が近づこうとすれば、その時には彼女のほうが遠ざかる。そういう繰り返しが、その後も、ずっと続いたのである。

いつしか陽子は、アルバイトを辞めていた。が、それでも客として私の前に現れた。しかし、それでも眼前に繰り広げられるのは、変わらぬ「付かず離れず」であった。

私もたまらなくなって、アルバイトを辞めた。実は、もう一度同じアルバイト先で働くことになるのだが、その時には、もう陽子の姿を見ることはなかった。

こうして私と陽子の物語は終わった。私の心に「ルベドの悟り」だけを残して。

観客もないまま、静かに幕は降ろされた。まるで曇天の空のような重苦しさが、いつまでも尾を曳いた。

再臨のキリストによる福音書　4-Ⅱ

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社